

お金って不思議だな、と思ったのはフリーランスになつてからのこと。

二九歳から六年半ほどを兼業作家として過ごし、「もう專業でいけるかな」と判断して会社を辞めた。作家として何とか軌道に乗ってはいたけれど、ちょっとした冒険だった。船上のプールで泳ぐのをやめて、海に飛び込むようなものだから。

「サラリーがなくなるって、想像したら怖いなあ」

退職の間際、昼休みに雑談していた後輩が洩らした。わがことと仮定しての言葉だが、私の行く末を軽く心配してくれていたのかもしれない。

大学を卒業してからずっと会社員として暮らしてきた私自身、フリーになるのは不安だったが、朝から晩まで小説を書いたり読んだりする生活は子供の頃からの夢だったから、喜びが大きく勝った。

そもそも——自分の父親は町工場をやっており、母方の祖父はかつて表具屋で、義父母も店をかまえていて、身内に会社員や公務員はほとんどおらず、独立独歩の職人タイプが多かった。それに気づくと、退職して作家になるのがごく自然に思えてきたのを覚えている。

かくして始まった自由業の日々。電話代もボールペン一本も自分で負担しなくてはならないんだなあ、編集者や読者から愛想を尽かされたらそこで終わるんだぞ、そうなった時に転職できるだろうか、などと思いつく暇もないままに書き続けて、ほどなくサラリーのない生活に慣れた。

ボーナスの時期になると自由業者は歯噛みしたくなるものだ、という風聞を耳にしていたけれど、それでもなかった。決まった時期のボーナスは期待できない代わりに、たまに思いがけない臨時収入（本の増刷など）がある。期待していないと少額でも大変うれしいのである。



絵・江口修平

お金の不思議

有栖川有栖

明日をも知れぬ稼業、と言つては大袈裟すぎるが、激しい浮き沈みがあるものと覚悟していたのに、年収に極端な乱高下はなかった。こんなものなのかな、意外と安定してよかったな、と思つていたある時——。

某所で顔馴染みやら初対面の方やらを交えて談話する機会があった。その席上でお金の話になり、何かのクリエーターをしている女性が言った。

「フリーになつて思うようになったんですけど、お金の出入りにはよく判らない法則があるみたい」

「ありますね！」と私は即座に返っていた。

やっぱりそうなのか。

しばらく前からお金が妙な動きをしているように感じていた。と言つても奇想天外なものではなく、ちょっと意味ありげという程度なのだが。

たとえば、旅行に出かけて二〇万円ほど使つたとする。帰宅して留守中に届いた郵便物を片づけていたら重版の通知が交つていて、入ってくるお金の金額が二〇万円。使つたばかりの額と一致している、といったことをよく経験する。

使つた分だけほんと臨時収入が入る仕組みになつていたらありがたいばかりだが、世の中そんなに都合よくはできず、逆のケースもよく発生する。期待していなかったお金飛び込んできたと思つたら、たちまち想定外のことが出来（しゅつぱん）してほぼ同じ額のお金の手許を離れて行く。

戯れに親しい同業者に訊いてみると、「そう言われてみれば」という反応が返ってきたが、たまに起きるから印象的に残る現象にすぎないのかもしれない。

デフレ基調が続く、そこからの完全な脱却が課題となつている日本。原因は経済学的に説明できるだろうが、もしもお金じゃべれたら、「とにかく僕を使わないと、僕は入ってこないよ」と言いそうに思う。

ありすがわ・ありす●1959年大阪市生まれ。同志社大学法学部卒。89年『月光ゲーム』でデビュー。2003年に『マレー鉄道の謎』で日本推理作家協会賞、08年に『女王国の城』で本格ミステリ大賞受賞。主な著書に『双頭の悪魔』『乱鴉の鳥』『鍵の掛かった男』などの推理小説作品のほか、怪談集『幻坂』、エッセイ集『有栖川有栖の鉄道ミステリー旅』などがある。

